

## 「恐れずに教える」

今から80年前、私たちの社会は大きな価値観の変化を経験しました。それまで信じていたもの、当たり前だと思っていたものが180度転換します。朝の連続テレビ小説のモデルになったやなせたかしの言葉で言えば、「ひっくり返る正義」に過ぎないことが明らかになったのです。だから彼は「ひっくり返らない正義」を模索します。そして、60歳代になって、「空腹の人がいればおなかいっぱい食べさせる」という『アンパンマン』を生み出しました。全ての人が平和で暮らすことができるようになると願いながら。

聖書にも価値観の変化を経験した人たちが登場します。

例えば、ヨナは最初、主の命令に背いてニネベへ向かいませんでした。「ニネベの人たちは救いに値しない」と思っていたからです。けれどもそれは、彼の勝手な思い込みに過ぎませんでした。そのことを大魚の腹の中で気づかされた「ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った」(ヨナ書3:3)。神の言葉に応えることが人の生きる道であることを体現したのです。

また、サウロは神の律法を守ることだけが神の思いに応えることだと思い込んでいました。だから、彼の目から見て律法を逸脱しているイエスの弟子たちを追い詰め、牢に送って満足していたのです。ところが、復活のイエスと出会って彼の人生は一変します。一時的に見えなくなっていた目が開かれた時、まさに「目から鱗が落ち」たのです(「すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、」使徒言行録9:18)。

もっとも、それまでの数々の行いによって、他の人々から「彼を弟子だとは信じないで恐れ」(使徒言行録9:26)られてしまいます。それでも、周囲の執り成しによって「サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった」(使徒言行録9:28)。イスラエルも異邦人も隔てなく神が愛してくださっていることを「堂々と宣教」(使徒言行録9:28、聖書協会共同訳)することが、イエスの弟子としての道であることを体現したのです。

私たちにとっての「ひっくり返らない正義」はこの神の愛にあります。神は、それまで敵対していたはずの者をも用いて、一人ひとりを愛していることを伝えられています。

とはいっても、キリスト教を信仰したら即座に世界が平和になるなどと言うつもりはありません。キリスト教信者たちが引き起こしてきた、平和を脅かす数々の事件については歴史が証言しています。あの原子爆弾を搭載した飛行機が出発する時も、従軍牧師は作戦の成功と無事の帰還を祈ったのですから。

それでも、私たちは神がこの世界を創られて「全ては良い」と言われた時のように、この世界がもう一度神の目に適うことを期待しています。先達たちが「過ちは繰り返しませぬから」と原爆慰霊碑に刻んだように、私たちも今一度思いを新たにするのです。

では、現代の私たちが「恐れずに」、「堂々と」伝えるべきものは何でしょうか。それはやはり「平和」へ向けた言葉でしょう。しかし、その道は険しい。すぐに「そんな夢物語を」と水を差す言葉が飛んできます。「実力を伴わない抑止力などあり得ない」と言われるかもしれません。イエスも言わわれている通り、「狼の群れに羊を送り込むようなもの」(マタイによる福音書10:16)です。

だからこそ、「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」(マタイによる福音書10:16)とも言われています。何度も跳ね返されたとしても、相手と同じ土俵に上がって「破壊の言葉」を用いるのではなく、「和解の言葉」を、平和への言葉を語り続けましょう。

「しかし主よ、わたしの主よ/わたしは力を奮い起こして進みいで/ひたすら恵みの御業を唱えましょう」(詩編71:16)と歌う詩人のように、私たちは今日も「恐れずに」、「堂々と」主の平和を伝え続けるのみです。

